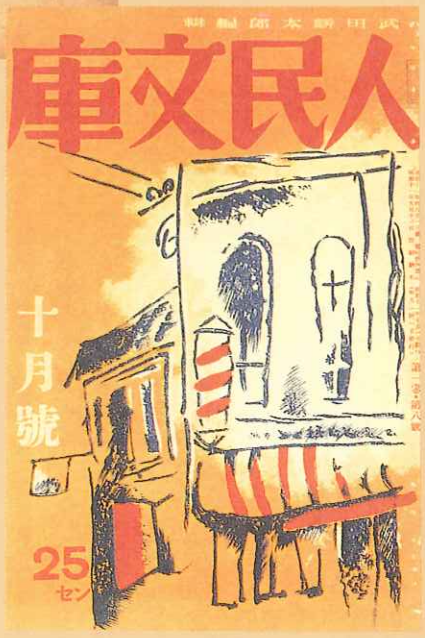
人民文庫

文学の体制内化を厳しく糾弾し、被抑圧階級＝庶民に
文学の起点を求めた反ファシズム・人民文学志向の文学雑誌。
戦前最後の左翼文学の砦となった『人民文庫』、
六〇年ぶりの復刻！

第一巻第一号、一九三六年三月創刊号

武田麟太郎《主宰》



第一巻第八号、一九三六年一〇月号

全二六冊・別冊一
一九三六年三月～一九三八年一月
菊判　並製　総五〇三四ページ
◉本体揃価格＝一八〇、〇〇〇円〈税別〉

小田切秀雄《解説》

不二出版

武田麟太郎（右、一九〇四～四六）
一九三七年八月 ©山村一平

◉復刻にあたって——

武田麟太郎主宰の文芸雑誌である本誌は、『文学界』の有力同人として文壇をリードしてきた武田が一部の同人の時局迎合的空気に反発し、また周囲の若い作家に活動の場を与える意味もあって、創刊したものである。

中心となったのは、高見順らの『日暦』と本庄陸男らの『現実』の作家たちに加えプロレタリア作家同盟出身の作家たちで、主な執筆陣は、新田潤・井上友一郎・田村泰次郎・円地文子・大谷藤子・田宮虎彦・渋川驍・平林彪吾・那珂孝平など。秋田雨雀・江口渙・青野季吉ら「社会主義の三長老」たちを囲んだ座談会、「勤労者の生活感想をぶちまける」などの特集記事、「市井談義」での社会・時事批評、「六号雑記」での文学批評などに、被抑圧階級としての庶民に文学の出発点を置こうとする反ファシズム・人民文学への志向がみられる。

二・二六事件のまさに一〇日前に創刊された本誌は、幾度かの発禁・検閲、そして研究会の最中にメンバーが特高に拘束されるなどの弾圧にもかかわらず、警保局の後押しで文芸統制のため結成された文芸懇話会や一部にファッショ的な傾向の見られる『日本浪漫派』などに対して独自の姿勢を打ち出した。

昭和初期の革命運動とプロレタリア文学運動が挫折・転向したのちの、帝国主義戦争へなだれ込んでゆく時代に、苦悩する若い左翼文学者たちの最後の砦とも言うべき本誌が文学史上、近代史上に占める位置は重要である。

内容見本
「「忘れちゃ嫌よ」の禁止」武田麟太郎（第一巻第七号・一九三六年九月）

人民文庫

九月號

市井談義

「忘れちや嫌よ」の禁止

「忘れちやいやよ」と云ふレコードが出版法で發賣禁止になつた。この數年來次から次へ頻出するレコードの歌と同じやうに何の藝術的價値もない卑俗極まるものである。

私は、出來るならば、あれら一聯のレコード——たとへば、花嶽行進曲、泣かせてね、滿洲思へば綠の地平線、その他の何々音頭と稱するものも發賣禁止になればいゝとさへ考へてゐる。それらは、大衆の最も俗悪低劣な趣味に乗じて、それに媚び大衆をます〳〵さうしたもの、非文化的な無智な奴隷として閉ぢ込めて置かうとする支配者の意志と一致してゐるからだ。

七月三日の都新聞家庭欄所載、内務省レコード檢閲係小川某氏の言によると、「忘れちやいやよ」も一人でぢつと聞いて見ると一寸も安つぽいエロではない、さうである。れいの「二人は若い」と云ふレコードにしたところで、あれが子供に歌はれてひどく子供に悪影響があるとは考へてゐない、さうである。また、道學者が見れば甚だ俗悪低劣だと感じても、それが彼らをして樂しませる以上、やがては正しい文化的素養の基礎となるかも知れない、とも云つてゐる。

それで以て彼らの意圖は充分判ると思ふ。あれらが文化的素養の基礎になるとは恐るべき創見と云つていゝだらう。

言を換れば、「忘れちやいやよ」によつて代表される同種類のレコードだつて、支配者は流行するのを默つて見てゐたいのだ。あるひは、それに力

◉推薦の言葉

語られなかった昭和文学史の二面をあぶりだす資料

水上 勉——作家

昭和一〇年代を文学青年期で過ごした私には、いま、武田麟太郎氏が個人で費用を持って発行された『人民文庫』はなつかしく、また、ふりかえって、日本文学史上の事件だったとあらためて思う。細野孝二郎氏や上野壮夫氏、堀田昇一氏などがたむろしていた『日本農林新聞』に昭和一五年からつとめたこともあって、『人民文庫』のことはしょっちゅう話にきいた。いま、全二六冊の目次を見るだけで胸のつまる思いだ。五号までの編集者が「石狩川」の本庄陸男氏とは。高見順氏の「故旧忘れ得べき」は名品といわれ、私も愛読したが、ほかに堀田昇一氏「自由ケ丘パルテノン」、間宮茂輔氏「あらがね」、立野信之氏「流れ」なども連載されたことを知って、それだけで生つばが出る思いである。

軍国主義政府寄りの文芸懇話会の結成や『文学界』に拠る小林秀雄氏、林房雄氏などを中心とした、戦争肯定派の中堅新人の各氏に抗し、庶民派だった武田麟太郎氏が「若い暴れん坊たち」のために発行した気骨のある面目がうかがえると同時に、それにこたえた若い勤労者出身の作家たちのエッセイや断簡にこの時代がよく語られていると思う。

昭和一一年から一三年は、日本軍閥が中国中部から南方島嶼の諸国に侵略を拡大した年代で、銃後に於ける文学界の戦争協力・不協力の立場を固守する作家や農民・勤労者たちの言動を知るためには、この企画は必見の復刻といえて、これこそ、語られなかった昭和一〇年代の闇黒の文学界の一部をあぶりだす資料だろう。

「デモクラット」、そしてリアリズム

小田 実——作家

私が武田麟太郎を評価するのは、彼がねっからの「デモクラット」であったから、そしてそのことにも基本的なところでかかわるが、彼が強靭なリアリズムの精神の持ち主であったからだ。彼の作品に共通するのは、この二つの彼の根本のありようだが、私が彼の作品のなかでもっとも好きな「井原西鶴」にも、二つはよく出ている。そして、考えてみると、井原西鶴もまた、この二つの基本のありようを、作品にも人生にも大きくもっていた大先達であったにちがいない。

私が、今、あらためて、武田がつくり出した『人民文庫』を評価するのも、この二つがそこに底流としてあるからだ。そして、もうひとつ、今この混迷の時代、何よりも必要なのは、その二つに腰をすえてものを見、ことを行なう——そのことであるからだ。

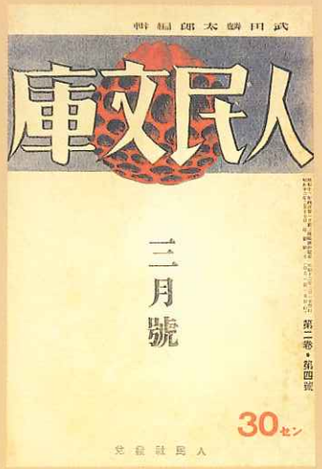
第二巻第二号、一九三七年一月臨時増刊号
島木健作・坪田譲二・平林たい子・芹沢光治良・窪川稲子・徳永直・中条百合子・片岡鉄平・広津和郎・徳田秋声らの作品を収録

翼賛的民衆運動に文学的に対決した『人民文庫』

池田浩士——京都大学教授・「文学史を読みかえる」会会員

『人民文庫』は、二・二六事件とほとんど時を同じくして創刊され、南京大虐殺とほぼ同じころ最終号を出して終わった。『人民文庫』の重要性が、こうした時代背景と密接にかかわっていることは、あらためて言うまでもない。この雑誌の主宰者・武田麟太郎が試みた「市井事もの」の民衆的リアリズムも、壊滅させられたプロレタリア文学運動にたいする内容的な自己批判の実践であったと同時に、「国民精神総動員」をはじめとする翼賛的・擬似主体的な民衆運動との、まさに生死を賭した対決にほかならなかった。

この対決を、時代的制約のゆえにあくまでも文学的になざるをえなかったことが、『人民文庫』の、これからますます評価されるにちがいないユニークさなのだ。この雑誌に結集した作家たちのうちには、若くして死んだ平林彪吾をはじめ、いまでは一般読者にとってなじみのない名前も少なくない。かれらを正当に文学史のなかに位置づけることは、戦後にあらためて活躍する田村泰次郎、高見順、円地文子、湯浅克衛らの『人民文庫』時代を見なおす作業とともに、近現代の日本文学の実像を明らかにするうえで、ぜひとも必要な課題だろう。大作や力作のあいだに配置されたコラムや囲み記事にも、またことのほか多い誤植のなかにさえ、これから本格的に再評価されねばならないひとつの文学的拠点における苦闘と肉声があふれている。



第二巻第四号、一九三七年三月号

抵抗の季節にふさわしい女性文学の登場

長谷川 啓——城西大学女子短期大学部教授

復刻の意義というものを、あらためて痛感させてくれたのが、ほかならぬこの『人民文庫』の復刻版である。私たちはともすれば作家の中に、あるいは作品の中に閉じこもりがちだが、雑誌の復刻はその時代の息吹きをつたえてくれるばかりか、その作家や作品が、どのような諸関係の網目の中で登場し、生まれてくるのか、その仕掛けそのものをまざまざと伝えてくれる。日本の革命運動が壊滅状態となり、作家同盟そのものまでが解体してから日中戦争開始前後の、暗い谷間の時代に、『人民文庫』がいかに抵抗の篝火を灯しつづけたか、この復刻版は何よりも明瞭に語っている。

ここにみる女性文学の登場は、男性文学に比べてまだ三割にも満たないけれども、理想にのみ視点が向けられていたプロレタリア運動期よりも、かえって足もとの現実がしっかりと見据えられ、抵抗の季節にふさわしい潜熱を感じさせる。革命運動の困難な戦いが描出されていると同時に、父権制下における対関係、結婚生活の中での女性の苦悩が、その叫きが、大谷藤子・矢田津世子・円地文子・佐多稲子・平林たい子・宮本百合子らによって執拗に炙り出されている。いまや今日のフェミニズム批評は、外国の文献に頼っていた啓蒙期から、日本の女たちの文化や歴史を本格的に検証する収穫期に入っているが、その意味でも、『人民文庫』は生きた貴重な資料、フェミニズムの宝庫だといえよう。

人民文庫

◉『人民文庫』関連年表

年号		『人民文庫』	関連事項
一九二八年			3 三・一五事件
二九年			4 四・一六事件
三一年			9 柳条湖事件
三二年			3 「満州国」建国を宣言
三三年			10 『文学界』創刊＝武田麟太郎・川端康成・小林秀雄・林房雄ら
三五年			3 『日本浪漫派』創刊＝保田与重郎ら
一九三六年（昭和11）	3	『人民文庫』創刊（実際は二月一五日に発行） 矢田津世子「神楽坂」 ～高見順「故旧忘れ得べき」 ～武田麟太郎「井原西鶴」	1 第二次『現実』創刊＝本庄陸男ら文学統制を目的とした文芸懇話会機関誌 『文芸懇話会』創刊
	5	～座談会「若もの一席話」＝新田潤・田宮虎彦・渋川驍・平林彪吾・上野壮夫ほか	2 二・二六事件
	7	～田村泰次郎「大学」	7 平野義太郎ら講座派学者一斉検挙
	8	～「日本に於ける社会主義文学の擡頭期を語る座談会」＝秋田雨雀・青野季吉・林房雄・金子洋文・藤森成吉ほか 円地文子「散文恋愛」	8 首相・外相・陸相・海相の四相で「帝国外交方針」を、蔵相を加えた五相で「国策の基準」を決定、大陸・南方への進出と軍備充実を定める
	9	武田麟太郎「国際文化擁護著作家協会書記局ジヤン・リシヤール・ブロック様」	
	10	～立野信之「流れ」	
	10・25	新宿のレストラン「大山」で徳田秋声の研究会を開いていた『人民文庫』執筆者のメンバー一六人が無届け集会という理由で特高に束縛される	
	11	「散文精神を訊く」＝徳田秋声・広津和郎・佐藤俊子ほか 平林彪吾「肉体の英雄」、検閲により途中一二頁の削除	11 日独防共協定
三七年	1	～湯浅克衛「城門の街」 座談会「働く女性は斯く視る」 ～堀田昇一「自由ケ丘パルテノン」 臨時増刊号として「現代代表作全集」を出す	
	4	座談会「日本の浪漫派を訊す」＝田宮虎彦・那珂孝平・上野壮夫・本庄陸男・古沢元ほか	
	5	間宮茂輔「あらがね」	
	8	座談会「勤労者の生活感想をぶちまける討論会」が連載。東京江東地区労働者街の労働者たちによる	
	9	金子光晴「人民文庫詩欄設置への言葉」 九月号発禁。金子光晴・高見順・平林彪吾・間宮茂輔・草野心平らの作品を除いて臨時号を発行 増刊号として第二次「現代代表作全集」刊行 編集責任者本庄陸男、健康不良のため、那珂孝平に交替	
	6		『報知新聞』紙上に「人民文庫・日本浪漫派討論会」連載
	7		文芸懇話会解散 蘆溝橋事件
	8		吉川英治・林房雄・吉屋信子ら各社特派員として戦地へ赴く
	9		内閣情報部官制公布
三八年	1	『人民文庫』終刊	
	12		南京大虐殺 第一次人民戦線事件
	8		『日本浪漫派』終刊

◉関連図書のご案内

日本左翼文芸家総連合＝編
戦争に対する戦争
○昭和3年5月刊
○解説＝西田 勝
○四六判・並製・426頁
○本体価格＝2800円

日本最初、戦前唯一の反戦創作集。小川未明ら無政府主義、金子洋文ら社会民主主義、鹿地亘ら共産主義、高田保ら自由主義の作家が、迫りくる戦争の姿を予感して描いた小説・戯曲ほか二〇編を収録。《復刻版》

小林多喜二＝主宰
クラルテ
○大正13年～15年刊
○解説＝布野栄一・総目次・索引付き
○A5判・上製・函入・総216頁
○本体価格＝4000円

本誌は、小林多喜二が、北海道拓殖銀行に勤務しているころ島田正策・戸塚新太郎・平沢哲夫・武田暹ら文学仲間とともに北海道小樽で発行したアンリ・バルビュスのクラルテ運動の刺激・影響の色濃い同人雑誌である。《復刻版》

犬田卯・鑓田研一ほか＝主宰
農民《全5巻・別冊1》
○昭和2年～8年刊
○別冊＝解説（高橋春雄）・総目次・索引
○A5判・上製・総2542頁
○本体揃価格＝85000円

農民文学運動が興隆した一九二〇年代、犬田卯ら農民文芸会の機関誌。大同団結をうたって都市のプロレタリア文学と一線を画しての農民自身による解放・文化創造を目的とした。《復刻版》

長谷川時雨＝主宰
女人藝術《総48冊・別冊1・付録1》
○昭和3年～7年刊
○別冊＝解説（紅野敏郎）・総目次・索引
○付録＝『女人大衆』36冊
○A5判・並製・函入・総9400頁
○本体揃価格＝150000円

本誌は、すべて女性の手になる女性の雑誌として発刊された。多くの女流作家を世に送り出すとともに、女性の文化的・政治的啓蒙誌として重要な役割を果たした。《復刻版》

神近市子＝主宰
婦人文芸《全10巻・別冊1》
○昭和9年～12年刊
○別冊＝解説（黒澤亜里子）・総目次・索引
○菊判・上製・函入・総6362頁
○本体揃価格＝150000円

主宰者・神近市子は、ジャーナリスト・翻訳家・評論家としてすぐれた女性解放思想家・実践者。それだけに、単なる文芸雑誌に終わらない、フェミニズムをはっきりと意識した雑誌である。《復刻版》

布野栄一＝著
政治の陥穽と文学の自律
○四六判・上製・308頁
○本体価格＝2600円

政治の名において抑圧されていた日本の近代社会で、平野謙・野間宏・本庄陸男らは、文学の名において何を表現したのか。「政治の中の陥穽と文学の自律」を論及し続ける著者の意欲作。

人民文庫《概要》

全二六冊・別冊一
一九三六年三月～一九三八年一月

●武田麟太郎《主宰》
小田切秀雄《解説》

●別冊＝解説・総目次・索引
〈別冊のみ分売可＝一〇〇〇円〉

●推薦＝水上 勉・小田 実・池田浩士・長谷川 啓

●体裁＝菊判 並製 総五〇三四ページ
本体揃価格＝一八〇、〇〇〇円〈税別〉

●一九九六年六月一括刊行！

第二巻第一〇号、一九三七年九月号

第二巻第一二号、一九三七年一〇月号

不二出版（株）
〒113 東京都文京区向丘1・2・12
電話〈03〉3812・4433
ファクシミリ〈03〉3812・4464
振替00160・2・94084

●本カタログ中の表示価格は全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。お近くの書店にご注文ください。

1996・4